

森の木魂（こだま）

2021 年 10 月 24 日発行 第 4 号



・宮脇先生の信念	1	・森びとファンクラブ	10
・追悼 宮脇昭先生	2	・里親植樹に参加して	11
・国連と日本政府へ温暖化防止の要望書提出	4	・心のふるさと探し	15
・今年の里親植樹が終わりました	6	・森は友だち・編集後記	16
・秋のたのしみ	8		



足尾・「白沢の森」づくりにかける宮脇先生の信念

宮脇先生にお会いしたのはお亡くなりになる数週間まえ、ガラス戸越しでした。その時のまなざしは鋭くても優しく、いつもの宮脇先生だと感じ、安心していました。宮脇先生の森づくりへの情熱はその鋭い眼光に現れています。射抜かれると「でも」も「しかし」という言葉は吹き飛び、「はい」と答えて納得してしまう。宮脇研にいた頃、「先生、この時間で仕上げるのは無理ですよ」と言っても、見つめられると「はい、わかりました」と言ってしまう。多くの人が、宮脇先生の熱い語り口とそのまなざしの虜になり、森づくりに共感するようになったのでしょう。



2021 年 9 月 15 日

森ともたちが宮脇先生を偲ぶ

私は 2018 年 5 月 19 日に車いすの宮脇先生のお供で足尾へ行き、初めて森びとプロジェクト委員会の活動を知りました。「白沢の森」とその周辺の植栽地を見せていただき、これは大変な努力の結果で、相当な信念が無いと続けられないなと思いました。「死ぬ気でやれ！本物になれ！」と言われた宮脇先生のパッションが後押ししていたのでしょう。鉱山跡地には重金属もあり、最も森林化しにくい場所であるのは欧州でも知られています。日本列島では潜在自然植生はほとんどが森ですから、鉱山跡地で成功すれば、日本国中、どこでも間違いなく森にできます。恐ら

く宮脇先生はそれを実験したかったのだと思います。それにしても無謀な計画であったと思います。

私は数十年前に足尾銅山を訪れて、ヘビノネゴザ(なぜか、重金属のある地域でも生き残る)しか生えないこの場所は、緑化はできない不毛の地と判断してましたから。そこに「いのちの森」が出来ていたのですから驚きました。

白沢の斜面に土を運び入れ、土壌を改良して潜在自然植生の夏緑広葉樹を植えていく作業は大変であったと思います。その後も除草、根腐れを起こさないような水抜き、さらにウサギ、ノネズミ、ニホンジカなどの獣害から樹木を守るために努力されたと聞いています。今では 10m を越えるミズナラ、コナラ、ブナ、

オオモミジなどが葉を寄せ合って生長しています。植栽地はその後にも広がり続け、トチノキ、シナノキ、ハウチワカエデなど、種類も多くなっていました。宮脇先生は、内心、ここまで立派な森になるとは思っていなかったかもしれません。一番大変な場所でも森をつくることのできる、死ぬ気でやれば本物の森をつくることのできる。「白沢の森」へ最後に訪れたとき、それを確信して嬉しかったのではないかと思います。

代表 中村幸人

追悼 宮脇昭先生



上の写真は 2004 年第一回足尾ふるさとの木による命の森づくり植樹祭前の地に立つ宮脇昭先生です。この写真を見ると、生前の宮脇先生は木々の生育に最も厳しい煙害の荒廃地で、ド素人の森びとたちが森をつくれるのかという不安を抱いていたのではないかと思います。その不安を見せずに、先生は「どうせやるなら最も厳しく難しい場所で森づくりをやろう」、「足尾で森が再生できれば世界中のどこでも森はつくれる！」と私たちに檄を飛ばしてくれた。それから 10 年経った 2015 年、「白沢の森」観察会で先生は、「これほどうまくいくとは思わなかった」（『足尾・白沢の森観察報告書』2015 年発刊）と述べてくれました。

当時の植栽地には卒塔婆に見えた竹の苗木支柱が乱立していました。植樹した苗木が枯れて支柱だけが残っていた草地が、小さな森になりました。森づくりのトップリーダーの故・岸井さんと森びと会員、その支援者が木々を育ててくれました。年間 100 日以上も現場に立って、自然界に向き合ってきた“森とも”の結晶で、やがては全ての生きものの生存基盤になってくれます。



2018 年足尾「白沢の森」にて



2015 年春・故 岸井成格理事長と「白沢の森」入口にて

この地に森をつくった森びとの会員の皆さん、ご支援くださった古河機械金属(株)様をはじめ、イオン環境財団等の企業、林野庁日光森林管理署等の中央地方行政の皆様に、心から感謝を申し上げます。

追悼 宮脇昭先生



上の写真は、この森づくり運動を提唱してくれた2021年7月16日に他界された宮脇昭さん(右)、2010年12月9日に他界された松崎明さん(中)、2021年8月9日に他界された瀬下恵介さん(左)です。2005年から1年間、宮脇さんと松崎さんは沖縄県、岩手県そして足尾町を訪れ、100年後の人間社会像を語り合いました。その対談を編集した著が『バチが当たるぞ!』(2007年発刊・創出版)です。その中で、「過去永遠、未来永遠の瞬間に、存在するだろう人類とそれが生み出した人間世界は、歴史から真摯に学び、未来への敬虔な祈りによる正義と理性の力によって確立されないならば、この人類は断末魔の叫びを上げるだろう。いま、立ち止まらなければ“バチ”が当たります。」(同書まえがき)と述べられ、また、“人類が未来のために今なすべきこと”を語られています。その実践が“山と心に木を植える”を合言葉にした命の森づくり運動です。この著を編集してくれた瀬下恵介さんが、83歳で天空の柱に旅立ちました。瀬下さん、“希望の松明”を灯していただきありがとうございました。ご冥福を祈ります。

顧問 高橋佳夫



約120名の森びとインストラクターを養成



南相馬市「鎮魂復興市民植樹祭」にて



旭川市江丹別のMS会植樹にて



2005年 森の中の都市づくり文化を学ぶ
ドイツの旅



2005年から横国大、早稲田、慶応、
立命館、東大で開催した
「森と生きるキャンパスフォーラム」



2005年から始まった
「八幡平の森づくり」にて

アクション



木を植えなければ何もはじまらない

世界の気温上昇を2040年までに1.5℃以下に抑えたい

国連と日本政府へ温暖化にブレーキをかける要望書を提出

私たちは、一昨年に続き、国連と日本政府・林野庁へ温暖化にブレーキをかける要望書（別紙参照）を提出しました。

国連には9月3日、アントニオ・グテーレス事務総長宛てに郵送しました。9月9日には、COP26議長国のボリス・ジョンソン首相と議長のアロック・シャルマ氏にも要望書を郵送しました。

気候変動の問題は、今、人類最大の課題であり、それは地球上のすべての生きものの持続的な生存にかかわっています。なにより先に、早急にやらなくてはならないことは、地球びとの国際連帯としてのアクションです。

既に、世界の平均気温は1.1℃上昇しています。「パリ協定」で表明した各国の削減目標では、2100年までに産業革命前の水準より3℃以上気温が上昇すると言われています。世紀末までに2.0℃以下に抑えるには、世界の気温上昇を2040年までに1.5℃以下に抑えなければならないようです。

気温上昇を1.5℃以下に抑えるには、「2050年までにCO2排出量を実質ゼロ」にすることが絶対条件です。よって、11月に開催されるCOP26では、「パリ協定」を上回る削減目標を掲げ、早急なアクションを各国が実行していかなければ、異常気象による災害が巨大化することになります。

私たちはIPCC第6次評価報告書に賛同し、地球びとの国際連帯による温暖化防止アクションを巻き起こすことを国連に求め、日本ではその日本版を実施することを要望しました。

政府・林野庁には10月19日、「2050年までに温室効果ガス排出実質ゼロ」に関する要望書を提出しました。

その基本には、日本政府は、IPCC第6次評価報告書を受け入れ、世界の気温上昇を2040年までに1.5℃以下に抑えられる「50%以上のCO2削減目標」（13年度比）に設定し、その対策を加速させることにしました。特に、私たちはこの間の森づくり活動で培ったノウハウを活かしたいと、林野庁には、「森林・林業基本計画」（案）にある10年間で1億本を植樹する国民運動を、もっと多くの木を植える国民運動として、誰もが参加できる休暇取得等の環境を整えて、全国各地で展開することを要望しました。5ページを読んでいただき、会員の皆様のご意見をも加えて、地方行政に私たちの要望を反映させていただきたいと思います。

要望書提出をするにあたり、ご指導、ご鞭撻を頂きました関係者の皆様、サポートしていただいた皆様にお礼申し上げます。

アクション

★COP26・第26回締約国会議への要望★

1、各国は毎年、世界の二酸化炭素排出量を最低 25～30 億トン削減することを誓約し、締約国はその目標値を決めて 2040 年まで継続する。



▼2020 年、世界の二酸化炭素排出量は 24 億トン減少しました（「グローバル・カーボン・プロジェクト」（GCP）による）。この貴重な体験は人類の生存基盤を健全にするために活かすべきだと思います。

2、国連は「国際 CO2 削減デー」（仮称）を提案し、国連加盟国はこの運動を実現する。

▼国連加盟国の社会経済事情に合わせた全国民の、例えば、都市や街のネオンを一斉に消す「ネオン・オフ・デー」、化石燃料の車に乗らない「ノー・カー・デー」等を実施する。また、毎月、「エコ休暇デー」と称して国民の休日を設けて、全国民による大地の森と海の森を健全にする活動を実施する。

3、国連加盟国は、熱帯雨林等の貴重な自然資源の開発を規制する具体的な提案をし、その実行のための努力を 2040 年まで継続する。また、森林などで CO2 の吸収量が排出量を上回る「カーボンシンク」を可能にしている森林を指定し、その吸収能力を公表していく。

▼「中国の森林は、予想よりも多くの CO2 を吸収している」という国際研究レポート（2020 年 10 月 31 日・ジョナサン・エイモス、BBC 科学担当編集委員）を参考にし、欧州で計画されている軌道上から森林を測定するレーダーを搭載した宇宙船「バイオマス」計画等を積極的に取り入れた、森林による CO2 吸収力を高めていくことが求められている。

★政府・林野庁への要望★

1、政府、林野庁は、IPCC 第 6 次評価報告書第 I 作業部会報告書を受け入れ、「2050 年カーボンニュートラル」の具体案に以下を加えてください。

FORESTRY AGENCY

林野庁

①世界の気温上昇を 2040 年までに 1.5 度以下に抑えられる日本の二酸化炭素排出量の削減目標を 2013 年度比 50%以上に設定する。

②衛星解析から日本列島の炭素吸収基盤（カーボンシンク）に値する森林を抽出し、吸収する炭素量を明らかにするとともに、炭素吸収基盤を増やす目標を具体的に策定し、実行する。

2、政府、林野庁は「2050 年カーボンニュートラル」の具体策として、自治体と国民の心がひとつになる行動を提案します。

①「全国 CO2 削減デー」（仮称）を設けて、全国一斉にネオンを消す。さらに、化石燃料を燃焼する車を運転しない日を設け、実施する。

②国民に「エコ休暇」（仮称）を取得させ、全ての国民が大地の森と海の森を健全にする活動に「エコ休暇」（仮称）を活用する。

3、「カーボンシンク」（CO2 の吸収量が排出量を上回る）に値する森林の拡大を図るために、全国の経済林の見直しを進めると共に耕作放棄地、休耕田、荒地等に多様な生態系の森をつくるためにふるさとの木を植える。この事業では安定した雇用の場を確保する。この具体的な政策が国民運動の森づくりに繋がることを期待します。

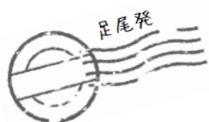
①国民運動の森づくりの栃木県版として、日光市足尾町の足尾銅山跡地の治山、緑化が済んでいない地・荒地等に木を植える県民運動を実施する。

②八幡平市松尾鉱山跡地（国有林）の土壌改良を行い、雪に耐えうる落葉広葉樹を植え、育樹活動を行う国民運動の岩手県版として森づくりを実施する。

4、政府の脱炭素社会に向けたエネルギー政策は、原発に頼らず、森林生態系を破壊しない再生可能エネルギーによる脱炭素社会づくりを急いでください。自然環境を資本とする社会を目指し、生活上の差別や格差を国民に強いことなく、誰もが自然資源を共有でき、誰もが取り残されない脱炭素社会環境を整えてください。

運営委員 大野昭彦

足尾発！



足尾・急斜面の荒廃地に 640 本の木を植えた里親植樹



半年間の里親植樹に、約 1 カ月間をかけて
育樹活動をしているスタッフ、サポーター

今年 5 月から始めた「里親植樹」は 10 月で第 6 回を迎えて終了しました。植樹に参加してくれた方は述べ 227 名とイオン環境財団様、植えた木は 14 種・640 本でした。植樹準備と草刈り等をしてくださいましたスタッフ、サポーターは述べ 100 人を超え、約 1 カ月間の育樹を行ってきました。滞りなく里親植樹をつくりだしてくれた全ての森ともの皆さんに心からお礼申し上げます。

コロナウイルス感染防止で自粛と我慢の生活を強いられ、木を植えたくても移動がままならない。また、足尾松木沢に行くには長時間を要し、交通費も嵩む。そんな方々の願いと想いを叶えられないかと始まった里親植樹。足尾・松木沢の現場では、森びとスタッフ、サポーターは、急斜面で土が少ない石ころや岩の多い草地に階段を造り、端材で土留め柵を作り、そこに運び揚げた土と砂交じりの土を混ぜた植栽地を作ってきました。協力してくれた里親の皆さんの「温暖化にブレーキをかけてほしい」との願いを、私たちは幼木にその願いを宿してきました。100 年後には、未来を生きる次世代の生存基盤になってほしいと願っています。改めて、里親植樹に参加してくださいました皆さんに、心から感謝します。

★参加者に代わって苗木を植えたスタッフ・サポーターの思いや願いを紹介します★

木を植えることは何年間もやってきたが、木を植えたい方に代って私が植え、育樹するという森づくり。その苗木には参加者の願いや思いが宿り、植えた苗木は写真となって参加者に送られる。その後の苗木の生長はインターネットで見られる。何らかの原因で苗木が枯れてしまうと植え直す。参加してくれた方の期待を裏切ってはならない。そんな気持ちを忘れずに、石ころだらけの荒廃地に木を植えてきた。是非、現場で苗木を見てほしい。（栃木県 加賀春吾）



石がゴロゴロした急斜面に、鉄筋、土留め板、水

分がたっぷり含んだ 10 リットルの土を背負い、露で足が滑らないように注意して登った準備作業。約 1 カ月間の重労働は、全身に大汗をかきながらでしたが、充実した時間が過ぎました。植栽地は狭いですが、参加者の願いや思いが詰まった木々は温暖化にブレーキをかける機能を発揮してくれると信じています。（茨城県 済賀正文）



里親植樹地は木々の生長が極めて厳しい石ころだらけの荒廃地。私たちが培ってきたノウハウを活かした植樹の準備は、全てが人力でした。

約 1 カ月間のその力はどこから来るのかといえば、

足尾発！

里親になられた方への責任感と困難な作業をやり遂げた後の満足感、そして仲間との連帯感です。ブログで紹介される作業後の集合写真の笑顔が忘れられません。喜寿を迎える私は、「今日も終わった。お疲れさまでした」が嬉しい。（栃木県 山本勉）



松木川から男体山方面を見て、急斜面の荒廃地に植えられた苗木が見える「白沢西の森」。この山肌

に小さな苗木の葉が色づきはじめ、秋の装いが感じられるようになりました。里親植樹の最後を迎えた10月、その様子を見てみるとこれまでの苦労が癒されます。“力持ち”ではない私にとっては正直つらい作業でした。それでも、里親になってくれた皆さんがいつの日かその木を見に来てくれることを思うと、辛かったことは嬉しさに変わり、次の元気に転化します。（栃木県 橋倉喜一）

2021年里親植樹に申し込んでくださった皆様に心より感謝いたします。2022年の里親植樹は4月から再開します。冬は足尾の動物たちの食べ物が減り、幼木や木々の皮を食べ、命をつなぎます。スタッフ、サポーターは獣害柵の点検や森内の点検を怠らず育樹活動を行っていきます。

副代表 清水卓

<7月、8月、9月、10月の里親植樹参加者>

★7月参加者：秋田県（今村博）、栃木県（弘永裕介、生沢美代子、竹澤一花、大類昌一、大類幸江、伊藤友代、白井敏江、石井庄次郎、荒川美枝子、生沢福子、関口光代、中村ミエ子、加賀春吾、加賀澄子、菅井佑介、福原辰夫）、茨城県（山口浩治）、埼玉県（淵上利和、阿部吉弘）、東京都（坂本昇一、柳明則、八幡直文、伊藤俊也、小林陽介、大賀楓、大賀渉、森善彦、保坂春子、高橋弓利子、石塚聡、味原進、菊池茂、阿部得男）、山梨県（守屋賢三）、千葉県（相川好夫、山崎玲子、斉藤美智子、小高新一、高島重武、長谷川正彦、新発田正利、寺西信一、木村好孝、扇谷健七、岩瀬和夫、徳元孝一、石井俊郎、千葉政人）、神奈川県（照井欣也、熊谷茂、武川知子、小林敬）、群馬県（高橋佳夫、高橋よし子）長野県（宮永路子）、兵庫県（幸義晴）、新潟県（小黑春枝）

★8月参加者：秋田県（戸松隆一）、岩手県（角岸禮子、佐々木克之、前田雅俊）、新潟県（竹内愛子、松尾崇史、田井信幸）、栃木県（山崎倫哉、山崎光子、山本勉、山本久枝、永島守、吉岡伸治、梶村尚生、福原辰夫、加賀春吾）、埼玉県（金子孝行、池田甫、古川宏之、黒澤剛）、東京都（岸井淳子、根岸大智、石井昭浩、松井富夫、松井恵子）、千葉県（藤森久美子）、神奈川県（菊地秀晶、大塚真人、田代元、山口通広、小林敬）、群馬県（久保昌宏、吉沢将史、松村宗雄、松村よし江、高橋佳夫、高橋よし子）

★9月参加者：青森県（郡司勝弘）、福島県（鈴木力）、栃木県（清水卓、生沼武夫、川澄久夫、小高孝史、深津哲、星野平吉、福田哲男）、埼玉県（石井光子、長谷川雄二、佐藤正夫、荒井昌一、菰澤忠則、福田博之、佐藤健三、森泰克、鈴木登、岩上光延、大熊清安、内海潤、佐藤晴夫、市川清行、斉藤悦樹、吉岡尚志）、茨城県（雨谷誠、大塚啓佑、塚崎将幸、塚崎武彦）、千葉県（大谷和夫）、神奈川県（黒須裕章、小林敬）、群馬県（高橋佳夫、高橋よし子）

★10月参加者：福島県（渡部俊一、松林英夫、菅野長八、小川尚一、山田悦子、岩橋孝、東城敏男、小林光男、佐藤正廣、道中内仁、今野祐三、松本善郎、原田晋明、菊池智彦、村西信裕、岩橋恵美、桜井勝延）、栃木県（生沼武夫、星野平吉、唐澤真子、橋倉喜一、福原辰雄、鎌田孝男、鎌田順子、加賀春吾、清水朋佳、清水明日香、鈴木イツ子、小泉将吾、廣木茂、住谷和俊、笹沼信男、高橋康友、矢野雅之）、埼玉県（鶴野経洋、福澤猛、荻野秀哉、前田雄輝、高橋健太、木村貴紀、小林忠一、西島光昭、清水敏、坪井貴生、唐紙将、新保哲之、川澄新一、星野孝志）、群馬県（高橋佳夫、高橋よし子）、神奈川県（神博喜、黒須裕章、岸尚利、小林敬）、千葉県（渡辺康夫、高橋謙二、高橋由美子）、東京都（中島薫）

この事業は公益財団法人イオン環境財団の助成金に支えられています。

秋のたのしみ



茨城県笠間市での週末農園暮らしも6度目の秋を迎えた。農園周辺の里山もくすんだ緑に変化してきたが、黄金色の田んぼや畦の彼岸花とのコントラストは、初秋ならではの美しさを見せてくれている。

今年の夏は、前半は雨続き、後半は酷暑といった天候不順に見舞われ、夏野菜の出来は良くなかった。6年目ともなると、お天道様には敵わないとニコニコしている訳にもいかず、地球規模での気候変動に思いを馳せたりして、必要以上に作り手の体力と精神を消耗させる年になった。

こんな過酷な夏を乗り越え、5月GWの仕込み以降、手間もさほどかからず収穫期を迎えるサツマイモ、サトイモ、落花生など土中で育つ作物は優等生だ。特に大粒のオオマサリの茹で落花生は、週末ファーマーの月見酒のお供として人気だが、その収穫を楽しみにしているのは、毎年出沒するハクビシンも一緒だ。

農園に着いたらまずは落花生殻の残骸の有無を確認。奴ら、熟した実を選んで掘り出し居心地の良いスペースに運び、上手に殻をむいて食事しているようだ。気性が激しい割に臆病な奴らしいが、平日閑散としている週末農園は格好の餌場なのだろう。はじめの頃は、「被害は自然との共生の証」などと嘯（うそぶ）いていた私も、今は被害者の会の隣人達と奴らの移動経路の特定に躍起となったり、ネット張りなどで対抗し秋の味覚の死守に努めている。

都市部での出沒情報が報道されているが、この里山

でも年々被害が増えているように感じる。周辺の広葉樹林が何カ所もソーラー発電パネルに置き換わったのも原因のひとつだろうか。環境に優しい再生可能エネルギーという名の自然破壊。斜面の地盤維持力がなくなる近い将来、直下の特養ホームは大丈夫だろうかなどと心配になる。

10m四方の小さな畑で、極力、連作を避けながら季節毎の野菜を作るのはなかなか難しい。どういうローテーションで何を作るか、半年先、時には1年先の畑の姿を想像し、秋虫のBGMでチビチビとやりながら、あれこれ絵を描くのは秋の夜長の愉しみの一つだ。もちろん、肴は茹で落花生だ。

アドバイザー 川端省三



ハクビシンに死守の落花生

秋のたのしみ



北海道の秋はかなり早く始まります。住んだことのない人にはわかりにくいと思いますが、地元の人には旧盆を過ぎれば、そろそろ秋から冬を意識し始めるのではないのでしょうか。その頃になると最低気温が 10 度を割り込むようになり、朝晩にはストーブをつけたくなってきます。もっとも、北海道の人は本州の人に比べると暑がりです。寒がりなのも影響しているかもしれません。家は断熱性が高く、煙突式あるいは FF 式の灯油ストーブを構え、屋外には 100～200 リットルのタンクを設置していて、遠慮なくストーブを焚いています。なので冬でも家の中は暖かく、シャツ一枚でビールやアイスクリームを楽しむのが普通です。我が家もツレが北海道、なかでも寒いことで有名な陸別の生まれのせい、長野に住んでいる今も、他の家より少し暖房が効いているようです。CO2 対策から見ると困ったものですが、その分夏はエアコンによる電力消費が少ないので、勘弁してください。

9 月には高山の紅葉が始まります。その時期に大雪や知床の山へ登りに行ったこともあります。二度ほど雪に見舞われ大変な目にあったことがあります。そして 10 月に入れば平地でも紅葉が始まります。秋の紅葉といえば普通は落葉広葉樹をイメージしますが、北海道の十勝や根釧地域ではカラマツの黄葉が見事です。

カラマツはもともと長野に自生していますが、北海道では 1950 年代から、当時盛んだった石炭鉱山の坑木として活用する考えで、積極的なカラマツ造

林が行われました。有名なのが釧路湿原に隣接する、パイロットフォレストと呼ばれる造林地です。開拓や山火事で荒れ果てた面積 1 万 ha を超える原野へカラマツを中心に植林をしたもので、ひとかたまりの造林地としては日本最大のものではないでしょうか。私は 80 年代にそこで仕事をしていましたが、10 月の中頃でしょうか、秋が深まりカラマツの葉が金色に染まる頃はまさに言葉ではいい尽くせない見事さです。パイロットフォレストの中には「望楼」という、もともとは山火事監視のための施設がありますが、そこから見下ろす景色は一面金のカーペット。仕事を終えて家に帰る頃には、光の弱くなり始めた秋の斜光が周りの木々と林道に積もった針のような落ち葉を輝かせ、夢の中にいるかのようです。もちろん若き 20 代に見た景色なのでそのぶん鮮やかな記憶として残っているのかもしれませんが。また、北海道の秋は進むのも早く、カラマツが金色に輝くのはほんの限られた期間、多分 1 週間ぐらいではないでしょうか。すぐに一面茶色になってしまうのはかなさもより印象を深くします。

炭鉱が廃れたことで北海道のカラマツは行き場を失い、山の木は一時期値段がつかないようなあり様になってしまいました。しかし、近年になって、ロシアからの輸入がなくなる一方、合板や集成材としての利用が進み、今では貴重な国産資源の一つになっています。

運営委員 井上康



持続可能な生存を願う市民の声を地方自治体へ提出

岸田内閣が発足しました。心配事のひとつに菅前総理が約束した地球温暖化政策の行方があります。アメリカ大統領だったトランプさん、日本の安倍さんなど国のトップが変われば政策が変更されてしまった経緯があるからです。

今年の5月に改訂された「地球温暖化対策推進法（温対法）」によって、県民や市民は国や地方自治体の温暖化政策に協力しなければなりません。

例えば、9月から始まった東京都議会では、一戸建て新築をする都民は太陽光発電設置が義務になるかもしれません。その有無が都議会で議論されています。都は、2050年までにエネルギーを100%脱炭素化し、都内の二酸化炭素排出量実質ゼロを目指していますが、そのひとつが太陽光発電設置の義務化のようです。

改正「温対法」に基づいた「2050年カーボンニュートラル」政策は、今後、このように地方自治体が具体化し、企業や県民・市民の協力を求めることとなります。脱炭素社会へ向けた政策はこれまでの暮らしを変えることとなります。脱炭素社会の実現は持続可能な生存の基盤を健全にすることが前提です。それは人類の願いでもあり、決して他人事ではありません。誰もがその社会においていかなければならないような政策を求めていかなければなりません。

各県の森ともは自分の事として、県民・市民の意見として地方自治体に反映させたいと願っています。

森びと県ファンクラブ(以下、県FCと略す)は、地方自治体の温暖化防止政策を検討し、県民・市民の課題と要望を話し合っています。

栃木県FCと福島県FCは県の「2050年カーボンニュートラル」構想を調べ、お付き合いのある県議会議員のアドバイスと協力を得て、地球温暖化にブレーキをかける陳情書、請願書にまとめ、9月に両県議会に提出してきました。

栃木県議会では、陳情書が県議会内の「グリーン社会実現特別委員会」で審議され、結果は継続審議になりました。委員会を傍聴した県FC代表の加賀さんは、「県下の企業が化石燃料の使用を禁止し、原発に頼らない再生可能エネルギーへの転換計画を県民に示していただけない部分が賛同されなかったことは残念」だったと話していました。

福島県議会では、「企画環境委員会」で審査され、採択されました。今後は、私たちが提出した請願書は本会議でも採決され、県の具体案が検討されていくことになります。

栃木県、福島県の県議会議員の皆さんのアドバイスとご支援に心から感謝申し上げます。

千葉県FCは一昨年台風被害現場を改めて踏査し、散策路やベンチを修繕しながら、温暖化に向き合う話し合いをハイカーや地域住民とつくりだしています。

ファンクラブ通信



私が松木沢に初めて訪れたのは2000年の夏でした。私はフライフィッシングが趣味で、友達に連れられて初めてこの場所に来た時、足尾銅山の跡地を初めて見ました。同時に、公害によって裸になった山々や、木々の無い広い河原も初めて見るようになりました。その景色は、ある意味壮大で感激したことを覚えています。

松木沢にはイワナ、ヤマメが生息しており、季節ごとに飛んでいる虫や水生昆虫を観察して毛ばりをセレクトしますが、両隣の川と比べても松木沢は釣りシーズンを通して羽虫も水生昆虫もとても少ない川です。それは河畔林が乏しいのと、増水で川が荒れやすいので虫が定着しづらいのでしょう。そんな松木沢ですが、なぜかイワナもヤマメの多く住んでいます。

釣りに行く度によく釣れるので不思議に思っていますが、きっと流程が長いので彼らが生きる伸びる場所がたくさんあるからだと思っており、改めてこの自然の底力を感じる一面です。

私はキャッチ&リリースで釣りをしています。魚が大きくなってまた再会できることを期待し、子孫を残し、松木沢が魅力ある川であり続けてほしいと思っています。多くの釣り人が訪れることで自然との共生という、人が自然とどう関わるかを考える場所になればと思い、里親植樹に参加しました。

埼玉県 金子孝行

近頃の気候変動の激しさには日頃から異常を感じています。地球温暖化の傾向を実感する日々に、自

分にもできることはないかと思っていたところ、森びと通信『森の木魂』が届きました。

通信に目を通して「里親植樹」のことが載っていたので、さっそく応募しました。微々たる協力ではありますが、「今、できること」をやらねばと思う気持ちでした。代りに植樹して下さったスタッフの皆様には感謝いたします。

長野県 宮永路子



森びとプロジェクトより「里親植樹」の案内が届き、趣旨に賛同し「里親」となりました。後日届いた植樹証明書に写っている苗木たちが、かわいい子供たちのようで、成長が楽しみです。

私が賛同した理由は、新たなスタートを切った「森びとプロジェクト」が、コロナ禍の制約がある中で、出来ることを追求する姿勢に感動したからです。

10年以上前に、足尾での植樹に参加したことを思い出しました。石だらけの山肌に四苦八苦しながら深く穴を掘り、穴に土を入れ「混ぜて、混ぜて」、そして苗木の種類も「混ぜて、混ぜて」と、宮脇先生の言葉をまねながら作業をしました。「混ぜて、混ぜて」、時には競合しながらも共存するからこそ木々は育つと、そのとき学びました。そのことが激動の今、組織の中での自分、人間関係、様々な場で思い起こされます。「混ぜる」ことは足尾の作業でも、組織の中、人間関係の中でも大変なことですが、お互いの共存と成長のために必要だと思っています。

植樹証明書の子供たちの写真を見ながら「お父さん、しっかりしなさい！」と言われているように感じます。これからも「白沢西の森」の子供たちから、色々なことを教えてもらいたいです。

埼玉県 山田知

ファンクラブ通信



気候変動に与える人間の影響は疑う余地がないという報告書が公表されました。人間の生活を見直していかなければなりません、科学で環境に対する影響を下げて物に囲まれたまま生きることは見直しになるのでしょうか。

私は畑で昔野菜を作っています。最近まで今のF1野菜と昔野菜（固定種）が違うことに気がつきませんでした。人間は命より楽や便利を選択しています。以前読んだ小冊子で宮脇先生が“机の上で議論を重ねても無意味”と現場主義を説かれていました。“本気”に対しての考え方も心に残りました。

宮脇先生の言葉はパラリンピック精神、脳神経科学から理解できるのではないかと思います。将棋ではプロは“考える脳”ではなく“無意識の脳”の部分を使うそうです。パラリンピックの選手は障がいを負う事で脳が再編され進化を遂げることがわかるようになりました。進化に必要なことはやる気です。

私たちの体の中に気が付かないだけで生き物としての強い力が眠っています。森びとの皆さんが懸命に植林してくださっても壊す勢いは凄まじいですね。いつも怒りを爆発させています。一人ひとりが生き方を変えていけば社会は変わっていきます。身近な苦しいことには生きる為の意味があるはずです。気候変動、コロナ禍という苦しみが本来の生き物として生きる新しい時代への入口になることを願っています。

私たち自身の生き物としての力を信じ最後の最後まで生き切る心を持ちたいと思います。

千葉県 藤森久美子

コロナ禍においてもなおかつ、地球温暖化にブレーキをかけたいと思う森びとプロジェクトのスタッフの皆さんの発想「里親植樹」に感嘆し、少しでも協力しようと咄嗟に思いました。

地球温暖化が叫ばれ久しいけれどもその対策に遅々として進んでいないのが現状だと思います。このままでは地球の温暖化はさらに進み、熱波や豪雨などの「極端」な現象はその頻度が増し、巨大化していくことが予想されます。

昨年オーストラリアで発生した森林火災は、気候変動による温暖化のため降水量が減少し、乾燥や干ばつが起りやすくなっていることが原因としてあげられていました。今年6月には、カナダのリットンで49.6度の異常な高温を記録し、暑さで亡くなる人も相次ぎました。大規模な山火事も発生しました。今後、温暖化が進むと日本だけ見ても食糧事情のひっ迫、猛烈な台風の危険性を超えたスーパー台風の発生、土砂災害の頻発度が予想されると言われています。世界的に見ても海面上昇がさらに進む、新たなウイルスが出現するなど、人類が生存することさえも危ぶまれています。

森びとプロジェクトの提起している「地球環境を保全する」「小さいけれど」「地球を健全にできないかと木を植える」に賛成です。小さいけれどできることをやっていきましょう。お手伝いできることがあれば教えてください。

東京都 坂本昇一



ファンクラブ通信



<JREU 大宮 OB 会の皆さん>

宮脇先生とは直接お話しした事はありませんが、私は、「いのちの森づくり」を全国的に展開してきた実践活動に学び、この活動を広めていく新たな決意を苗木に宿し、「枯れるなよ、丈夫に育てよ」との願いを込めて里親・追悼植樹に参加しました。

追悼植樹後は、「うんしゅう亭」前で「宮脇昭さんを偲ぶ会」に出席しました。その場では、宮脇先生との思い出、現場主義の宮脇先生の活動から何を学び、何を私たちが継承していかなければならないのか等の自由な討論が行われました。

この日に集ったシニアたちの心には、地球温暖化を防止するために、「山と心に木を植える」を合言葉にした活動の輪を社会にもっと広げていかなければという波紋ができたのではないかと思います。

私たちが16年前に植えた苗木が大きく生長し、岩肌だらけの斜面がみどり豊かな森に甦った風景を目の当たりにして、改めて、森びとプロジェクトの活動の大切さを実感しました。

福田博之

風に揺れるススキの穂に、秋の気配を感じる9月15日、里親植樹に参加しました。長年にわたり足尾での植樹を指導してくださった宮脇昭さんの追悼植樹となったこの日、喪章を付けて弔意を表し、93本の苗木を丁寧に植え付けました。狭い急斜面の植樹地で穴を掘り、岩をかき出して植えたのは苦労しましたが、事前に森びとスタッフが土留めの柵を作り、黒土を運んで頂いていたお陰で、無事に植樹ができました。

私は今日ここに来て、しっかりと根付いて森となっている白沢を眺め、一人一人の思いの結実がこの森を再生出来ている事に改めて感動し、自分の心に植えた木も枯らすことなく根を張り続けていこうと決意を新たにしたい一日となりました。

星野平吉



万全な準備がされていた中での93本の里親植樹は、本当に楽しいひと時となり、感謝の思いしかありません。スタッフの皆さんありがとうございました。

私が、植樹に参加した理由は二つあります。一点目は、50年あるいは、100年に一度の大雨が毎年のように頻発し、九州地方を中心に甚大な被害が発生している。これは、明らかに人災と思っていること。二点目は、登山、ハイキング、トレイルランが趣味の自分にとって、お世話になっている自然に恩返しをしたかったことです。少しでも、貢献できたかなと勝手に満足しています。

植樹後の宮脇昭先生を偲ぶ集いでは、年齢じゃない、自ら日々どのように生きていくかが大事なんだと思いました。死ぬまで、自分も青春を謳歌していくと改めて決意しました。その場から見えた大きく育っている「白沢の森」は、私たちの活動がつくりだした未来の財産だということを確認することができました。私の次のアクションは、11月3日に行われる、中倉山の孤高のブナに土を運び揚げるボランティアに参加することです。

鈴木力

心のふるさと探し

森びとよ、本物になれ！

宮脇昭先生と出会ったのが1994年。5年後、北海道大沼での森づくりからお付き合いが始まり、その後、森づくりの指導を受けてきた。当時から気候変動が人間社会を脅かすのではないかと考え、私は宮脇先生から、元気な森をつくり育てていく活動の指導を受けてきた。先生からすると、ド素人の私たちとすすめる森づくり活動は不安であったに違いない。

振り返るとお会いした時からの3～4年間は、ド素人の私の性格や人間性を、森づくりを通じて観察していたに違いない。私たちは大沼の森の中で、足尾の荒廃地でも土を掘り、臭いを嗅ぎ、時には土を舐めて、土づくりの大切さを身体に沁み込ませてきた。母樹に相応しい木の下でどんぐりを拾い、どんぐりから虫を取り除き、来春まで保管し、ポットにどんぐりを蒔くなど、先生は土づくりから育樹まで、森づくりに関して一切の妥協はしなかった。常に、「本物になれ！」と言って、私たちの人間性を見抜いてきたと思う。

2005年の第一回「足尾・ふるさとの木による命の森づくり」（植樹祭）には、1千人以上のボランティアが集ってくれた。半年以上かけて植樹地を整え、そこに植えた苗木は約4千本、参加者も主催者も初めての植樹体験。予定したタイムスケジュール内で事故や怪我もなく、予定していた苗木を植えられるのか、現場責任者の私は不安になっていた。不安は的中し、予定していた苗木は時間内で植えられない状況になった。私は、残った苗木は後でスタッフが植えればよいと思っていた。その案は先生に見抜かれ、先生は「一本の苗木も残すことなく最後まで植えきれ」と、私は一喝された。

生前、宮脇先生は「一度植えた木は動くことはできない、そこで命をかけて生きる。その恵みで人は生きている、手抜きはするな！」と言っていた。

植えた木は暑かろうと寒かろうと、暴風や雪が降ろうと動けない。その後は、周りの草との競争に耐え、鹿や猿、ウサギに梢や樹皮が食べられても生きぬかなければならない。それを支えるのは私たちの



2004年

植栽前の足尾・臼沢の森にて

森作業であり、そこには私たちの立ち向かい方が問われる。暑いから、寒いからと言って、人間の都合に森作業を合わせようとすれば森の恵みはいただけない。

「本物になれ！」という意味はここにある。宮脇先生が口うるさく言い、その信念を曲げなかったことは森づくりのリーダー育成であったと思う。荒廃地での植樹は先生にとっても初めのことであり、その上、木々の生長にはとても厳しい環境下ではそれを担う人にかかっていると感じ取っていたに違いない。それ故に、先生の森づくりへの信念はブレることなく、森と生きる人間性を養ってきたと思う。

2005年の植樹祭では、全ての苗木を植えきり、その後のセレモニーでは参加者全員で達成感を味わい、楽しいひと時を過ごすことができた。最後の記念撮影での宮脇先生の微笑は、今では私の心のふるさとである。

“森づくりは人づくり”という大切な事を教えてくれた宮脇昭先生。その先生も今年7月16日、遠い天空の杜に旅立たれてしまった。先生よりも先に旅立った松崎明さん、岸井成格さん、角岸幸三さん、そして森びとの先輩諸氏のこれまでのご指導に心から感謝申し上げます。

宮脇先生、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

顧問 高橋佳夫



2005年の「大沼の森づくり」にて
（『サンデー毎日』より）

森は友だち

16年前から毎年造った「白沢の森」の600段もの階段。その階段が朽ちて部分的に危険になった。今年の冬季作業で改修することになっている。間伐材の階段には数えきれないほどの森との情熱や苦痛が滲み込みこんでいる。また、熊や鹿等の動物たちが命をつないでいる獣道でもある。そんな思い出を噛みしめながらの冬季の森作業は待ち遠しい。

何事も初体験の森づくり、自然が相手なので日々なにが起こるのか分からなかった。予定を立てても自然界の都合に合わせるほかなかった。階段が15年間ももつとは思ってもいなかった。県が作った間伐材の土留め柵は土壌分解動物の活動で分解され、土に還りつつある。森作業の計画は現場に立って自然を観察し、蓄えた知識に照らし合わせて作成することの大切さを知る。

栗は、「桃栗3年、柿8年」と言われるとおりに実を付けた。熊や猿はその実が青いうちに食べてしまう。鹿や猪は熟して落下した実を食べる。人は、自然の恵みを独り占めにできないことを知る。アキグミは動物が種を運びあちこちに芽を出し、風に運ばれてきた種でヤマナラシは芽を出す。初めから植えた木々は新しい仲間を受け入れて、生物社会を育んでいる。

遠くから森を観ているだけでは「緑が増えましたね!」ということだけしか分からない。足尾・松木沢の山の装いは人と生きものたちの未完成の共同制作である。森と生きる心得が育める森づくり。

顧問 高橋佳夫

編集 後記

あれはたしか2004年のGW。実家に帰省していた時だったと思います。テレビの中その人は、縦横無尽に動きまわり、まっすぐなまなざしで、「愛するための人のための森づくり」を説いていました。周りの人々はみな笑顔。“木を植える活動”で世界各地を飛び回り、集う人たちを夢中にさせている。「彼が完成した森をみることはないだろう」という内容のナレーションが流れる終わり際のシーンでは、酒を片手に涙がとまりませんでした。この人に会いたい！これが宮脇先生をしり、のちに森びとに入るきっかけとなった出会いでした。その後、森びとはもちろん、他の団体の植樹祭などにも参加してたくさんのことを学

（飲んで）、たくさんの人々に出会うことができました。いまではただ感謝しかありません。

世界中に広がり、そして評価されている宮脇の森づくり。とはいってもまだまだいろいろな意味で先生の理想からは遠いところにあるのではないのでしょうか。森づくりのバトンを手渡された一人として、微力ながらこの先も“山と心に木を植える”活動を少しでもひろげていきたい、そう願っています。「宮脇の森は確かにこの胸に」（広報 小黒伸也）



森の木魂（こだま）第4号（2021年10月24日発行）



発行：森びとプロジェクト

発行人：中村幸人

編集人：森びとプロジェクト編集委員

第一版

〒141-0031

東京都品川区西五反田3-2-13 3F 303号室

TEL&FAX 03-6417-3750

<http://www.moribito.info/>

Email info@moribito.info

